

## 染殿内侍をめぐって：『大和』から『伊勢』古注、そして『古今』注へ

著者	木戸 久二子
雑誌名	三重大学日本語学文学
巻	12
ページ	35-44
発行年	2001-06-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10076/6566">http://hdl.handle.net/10076/6566</a>

# 染殿内侍をめぐつて

—「大和」から『伊勢』古注、そして『古今』注へ—

木戸 久二子

はじめに

『尊卑分脈』（注一）によると、在原業平には三人の男子があったことになっている。棟梁・師尚・滋春である。「母斎宮恬子内親王」（注二）と記され、高階氏の養子になったとされる師尚は別にして、棟梁と滋春の母については何の記述もない。

しかし、『伊勢物語』冷泉家流古注の世界では、滋春の母は染殿内侍と信じられていた。冷泉家流古注が共通して女に染殿内侍を当てている章段は、第二十二・九十四・九十九段の三章段（注三）である。その背景には、荒唐無稽としか呼べないようなものにしろ、彼らなりの論拠が存在するはずである。

本稿は、『伊勢物語』冷泉家流古注の系統で滋春の母とされる染殿内侍を取り上げ、彼女が業平と関係があった女性の一人で滋春の母である、と見なされるに至った過程を明らかにしようとするものである。

染殿内侍という名は、『伊勢物語』古注釈以前に『大和物語』第五百十九段に登場する。

染殿の内侍といふ、いますかりけり。それを能有の大臣と申すなむ、ときどきすみたまひける。ものをよくしたまひければ、御衣どもをなむあづけさせたまひけるに、綾どもをおほくつかはしたりければ、「雲鳥の紋の綾をや染むべき」と聞えたりしを、ともかくものたまはせねば、「えなむ仕うまつらぬ。さだめうけたまはらむ」と申したまつりければ、大臣の御返しに、

雲鳥のあやの色をもおもほえず人をあひ見て年の経ぬれば

となむのたまへりける。（注四）

と、「能有の大臣」と関係があったことが語られている。「能有の大臣」とは源能有（承和十二年（八四五）〜寛平九年（八九七））、文徳天皇の皇子だったが源姓を賜り、右大臣に至つ

た。「近院の右大臣」「近院の大臣」と呼ばれる。能有のことは「文徳天皇第一皇子」とするものを少なからず見かけが、惟喬親王の方が一年早い承和十一年（八四四）の生まれであり、不審である。『古今和歌集目錄』（注五）には「文徳天皇第一源氏」とあるので、その誤伝であらうか。しかし、『尊卑分脈脱漏』（注六）にも割注で「但第一皇子也云々」とあり、古くからの混乱を思わせる。

染殿内侍については、「藤原良相（八一六―八六七）の娘とか、藤原因香朝臣という説があるが定まらない」（新編日本古典文学全集『大和物語』頭注）（注七）と、定まらないとはしながらも二つの具体的な説が示されている。この二つの説のうち、前者の「良相の娘」説は『伊勢物語』冷泉家流古注が載せるものであるが、その典拠を古注釈以外で確認することは不可能である。先に、後者の「藤原因香朝臣」説がどこから生じたのかを見ておきたい。

『大和物語』第百五十九段では、能有の大臣が「雲鳥のあやの色をもおもほえず人をあひ見て年の経ぬれば」という歌を詠む。この歌は、第十六番目の勅撰集『続後拾遺和歌集』（注八）の巻第十四・恋四（八八五）に「典侍因香朝臣につかはしける」との詞書で載るものである。染殿内侍を藤原因香朝臣とする後者の説は、この『続後拾遺集』の詞書から来ているらしい。

それでは、『続後拾遺集』はこの「雲鳥の……」の歌を『大和物語』から採った際、「染殿内侍」とある相手の女の名を何故

「典侍因香朝臣」としたのであろうか。

その根拠は、『古今和歌集』巻第十四・恋四（七三六・七三七）にある。

右のおほいまうちきみすまずなりにければ、かのむかしおこせたりけるふみどもをとりあつめて返すとてよみておくりける

典侍藤原よるかの朝臣

たのめこし事は今はかへしてむわが身ふるればおきどころなし

返し

近院の右のおほいまうちきみ

今はとてかへす事のはひろひおきておのがものからかたみとや見む

「近院の右のおほいまうちきみ」、すなわち源能有の歌は『古今集』の八四八番と八六九番にも入っているが、それぞれ哀傷歌と雑歌である。能有と何らかの関係があった女性として名があがるのは、この七三六・七三七番の贈答歌の「典侍藤原よるかの朝臣」だけなのである。

『大和物語』第百五十九段に見える「染殿内侍」のままであればそれが誰なのか分からないし、『伊勢物語』冷泉家流古注が記す「良相の娘」説では、彼女の實在すら確認できない。『続後拾遺集』は二条為藤・為定の撰であり、冷泉家流古注の説をそのまま採るのは憚られたということもあるかもしれない。そうすると、『古今集』に源能有との交渉が記されている「典侍因香朝臣」に落ち着くのが最良の選択、ということだったのであ

ろう。

典侍藤原因香朝臣の家系、生没年等は明らかではない。『古今和歌集目録』等の記述から、『古今集』八五五番に歌を載せる「尼敬信」が母であること、清和天皇から醍醐天皇までの五帝に及ぶ宮仕えだったことが分かる。現代の注釈や辞典の類に、北村季吟の『八代集抄』により高藤の娘と載せる場合があるが、確かな出自は不明というほかないであろう。『毘沙門堂本古今集注』（注九）の巻第七・賀（三六四）の因香の歌に関する部分に、「此王子ノ御母ハ藤原高藤御娘也」という注記がある。季吟がこのような記述をうっかり引用してしまった可能性も、ないとは言えまい。

## 二

『大和物語』第六十段には、前段に引き続いて染殿内侍が登場する。

おなじ内侍に、在中将すみける時、中将のもとによりみてやりける。

秋萩を色どる風の吹きぬれば人のころもうたがはれけり

とありければ、

秋の野を色どる風は吹きぬともころはかれし草葉ならねば

となむいへりける。かくてすまずなりてのち、中将のもとより、衣をなむ、しにおこせたりける。それに、「あらはひなどする人なくて、いとわびしくなむある。なほかならずしてたまへ」となむありければ、内侍、「御心もであることにこそはあなれ。

大幣になりぬる人の悲しきはよるせともなくしかぞなくなる」

となむいひやりける。中将、

ながるともなにとか見えむ手にとりてひきけむ人ぞ略と知るらむ

となむいひける。

今度の恋の相手は在中将、在原業平である。源能有（承和十二年（八四五）〜寛平九年（八九七））と関係があるのであれば、業平（天長二年（八二五）〜元慶四年（八八〇））とも年齢差はあったとしても、夫婦であることは不可能ではないだろう。「秋萩を」と「秋の野を」の贈答歌は、『後撰和歌集』巻第五・秋上（二二三・二二四）に「女のもとより、ふん月ばかりにいひおこせて侍りける」の詞書で載る「よみ人しらず」の歌と、業平によるその「返し」（ただし、初句は「秋の野を」ではなく「秋萩を」）である。

染殿内侍が登場する『大和物語』第一百五十九・第六十段で注目したいのは、内侍が「ものをよくしたまひければ」と、器用な人だということで、男たちが着物の仕立てや染色などを頼ん

でいるという点である。特に業平は、「すまずなりてのち」も、「衣をなむ、しにおこせたりける」といった図々しさである。そういえば、『古今集』七三六・七三七番の典侍因香朝臣と近院右大臣の贈答歌にも、詞書に「すまずなりにければ」という表現があった。

『伊勢物語』の冷泉家流古注が女に染殿内侍を当てる章段の一つが、第九十四段である。

むかし、男ありけり。いかがありけむ、その男すまずなりにけり。のちに男ありけれど、子ある仲なりければ、こまかにこそあらねど、時々もの言ひおこせけり。女方に、絵かく人なりければ、かきにやれりけるを、今の男のものとて、一日二日おこせざりけり。かの男、「いとつらく、おのがきこゆることをば、今までたまはねば、ことわりと思へど、なほ人をば恨みつべきものになむありける」とて、ろうじてよみてやれりける。時は秋になむありける。

秋の夜は春日忘るものなれや霞に霧や千重まさるらむ

となむよめりける。女、返し、

千々の秋ひとつの春にむかはめや紅葉も花もともにこそ散れ（注十）

『伊勢物語』注釈史の時代区分では新注に属する『勢語臆断』や『伊勢物語古意』も、この『伊勢物語』第九十四段の女を染殿内侍だとしている。しかし、この章段の贈歌は『古今六帖』

二八七五番（初句「秋のよの」）ではよみ人しらずの歌であり、『在中将集』等の詞書でも染殿内侍の名は見えない。それなのに、冷泉家流古注だけでなく『臆断』等までが、何故この第九十四段で染殿内侍を想起するのであろうか。それは、男が「すまずなりにけり」、つまり別れた後でも「時々ものいひおこせけり」という、『大和物語』第五百五十九・六百十段との共通点によるものと思われる。さらには、『大和』第六十段の贈答歌の初句「秋萩を」「秋の野を」と同様、『伊勢』第九十四段が「時は秋」で、歌の初句もそれぞれ「秋の夜は」「千々の秋」となっていることにもよるのであろう。

『伊勢』第九十四段では、男と女は「子ある仲」ということになっている。この本文により、冷泉家流古注ではその子を滋春とするのであるが、その根拠は、長男の棟梁は正妻である有常の娘（筒井筒の歌を詠み合った幼なじみであり、早くから結婚関係にあった）の子と見るのが穏当なので、滋春の母は染殿内侍、ということではないだろうか。『臆断』と「古意」もやはり染殿内侍を滋春の母とするが、新しい男については源能有（冷泉家流では平定文）だとし、あくまでも『大和物語』第五百十九・六百十段に基づいた論の展開を見せている。

ところで、『和歌知頭集』（注十一）では第九十四段の女を在原行平の娘とする。第七十九段の、行平の娘の腹に貞数親王が生まれた際の「時の人、中将の子となむいひける」という本文を拡大解釈した結果なのであろう。事実、改めて『伊勢物語』

の本文を見渡してみると、昔男の「子」に関する記述は、第七十九段と第九十四段の二章段に見られるだけなのである。本来別の話であるはずの章段を、必要以上に関連づけて読むことに對する批判は当然であるが、『知類集』が『知類集』なりの基準で『伊勢物語』を本文に忠実に読もうとしている一つの現れである。

滋春に関しては、『本朝皇胤紹運錄』（注十二）が、師尚同様に恬子内親王の子だとする異説を記している。その解釈では、業平と斎宮との関係は一夜で終わったわけではなく、その後にも逢う機会があり、再び子を授かったということになる。しかし、師尚と違つて滋春はどうして養子に出されなかったのか等、無理がある設定のように思われる。もっとも、斎宮を退下して京に戻った後、業平との関係が復活して生まれたと見れば、斎宮ではなくなっていたので隠す必要がなかった、ということなのかもしれない。

### 三

第九十四段以外で、『伊勢物語』の冷泉家流古注が女に染殿内侍を当てるのは、第二十二段と第九十九段である。

第二十二段は、「はかなくて絶えにける仲」を忘れられなかった女が男に歌を贈り、男もそれに返して早速その夜に逢い、「いにしへ、行く先のことどもなど」を語り合うという話である。

「秋の夜の千夜を一夜にならずへて八千夜し寝ばやあく時のあらむ」「秋の夜の千夜を一夜になせりともことは残りてとりや鳴きなむ」と歌を詠み合った末、「いにしへよりもあはれにてなむ通ひける」という結果になる。

この章段も、一度は別れた男女の関係が復活するという点で、別れた後も男が女にものを頼む『大和物語』第百五十九・百六十段や『伊勢物語』第九十四段との類似を指摘できる。さらにはここでも、詠み交わされる歌の初句は「秋の夜の」なのである。

『伊勢物語』第九十九段は、「右近の馬場のひをりの日」に「むかひに立てたりける車に、女の顔の、下簾よりほのかに見えければ」、「中将なりける男」が歌を詠みかけたという話である。この章段の男女は出会ったばかりであるし、季節も秋ではない。冷泉家流古注が第九十九段に染殿内侍を持ってくる根拠は、第九十四段と第二十二段とは異なるのは明らかである。

その答えは、宮内庁書陵部蔵『伊勢物語抄』（注十三）の「ひをりの日」に関する注釈に見えている。初めに「北野の祭をいふなり」という説をあげ、それを否定した後に、

二には、此は内裏の内侍所をまつり奉らんとて右近の陣所にをろし奉るを云也。内侍所は日神の神也。されば日下と云也。おろし奉る義也。

と記している。『毘沙門堂本古今集注』の四七六番歌の注にも、「當家ニヒヲリト云者内裏ノ内侍所ノ祭也」とあり、冷泉家流

古注と同様の解釈をしていることが分かる。

「ひをりの日」から日の神―天照大神―が連想され、天照大神と言えば三種の神器の一つである八咫の鏡、そして八咫の鏡を保管しているのは内侍所、ということなのである。内侍所といえはそこで働く女官たち、ということで、業平の恋人たちの中から染殿内侍が選ばれたのであろう。

内侍は、他の女房同様、氏をつけて呼ばれるか、父や兄の官職名をつけて呼ばれるのが一般的である。そうすると、染殿内侍という呼称はどこから来ているのであろうか。染殿といえは藤原良房邸である。おそらくは、身内だという理由で良房邸、または娘の染殿后のもとに仕えていたことがあるから、というような理由なのであろう。先にも述べたように、管見に入った限りでは、藤原良相にそのような女子があったという記録は見られない。つまり、冷泉家流古注が描くような染殿内侍と考えられる人物は存在していないのである。

『伊勢物語』において良相の娘と言えば、第七十七・七十八段にその四十九日の法要の話が見える、文徳天皇の女御、多賀幾子である。その第七十八段の『伊勢物語抄』の注には、ある人の曹司の前の溝に据えてあった石について説明する部分で、「此石も後には内裏の陽明門院の前のみぞ、染殿内侍のさうしの前に被立たり」「経行の妹、染殿内侍のさうしのおかれたる、盗よせて、彼みこに奉り給也」と、染殿内侍の名が登場する。兄妹に当たる常行・多賀幾子との関連からの登場なの

であろう。また、『伊勢物語』第四十五段の恋死にしよう娘に、冷泉家流古注では「西三条左大臣良相の娘園子」を当てている。しかし、この娘はこのまま死んでしまうので、彼女が染殿内侍だという設定はあり得ない。おそらくは、『伊勢物語』に登場する良房や染殿后、さらには多賀幾子・常行といった人物たちの周辺に存在し、業平との関係も生じたであろう人物として新たに造形されたのが、染殿内侍なのであろう。

兩海博洋氏は、藤原長良の娘で典侍であった有子が染殿内侍だ、という説を主張された（注十四）。確かに、条件に合致する人物を消去法で求めていくと、良相の娘ではなく、普通言われるところの内侍すなわち掌侍でないとしても、有子が最有力候補ということになるであろう。だが、『大和物語』の『伊勢物語』関連章段を考えたとき、また、『伊勢物語』冷泉家流古注や『古今集』の古注釈等で語られる染殿内侍像を念頭に置いたとき、彼女が果たして実在人物と言えるのかどうかは大いに疑問だと思われる。

#### 四

染殿内侍という人物の特徴として、『伊勢物語』古注の中でも、冷泉家流古注系統には登場するが、『和歌知頭集』系統には全く登場しないということがあげられる。逆に言えば、染殿内侍の名が見えるならば冷泉家流古注の影響を受けていると見

なすことができるわけである。たとえば、滋春に仮託した『伊勢物語髓脳』にはその名が見えるし、『伊勢源氏十二番女合』では第十一番目に登場して未摘花を相手に持、という結果である。

『古今集』の古注釈の中では、巻第八・離別歌(四〇五)の紀友則の歌を「詞ニ、道ニアヘリケル人ノ車ニ物ヲ云ツキテ別ケル所ニテ読メルトハ、染殿ノ内侍也」(『弘安十年古今集歌注』)(注十五)としたり、巻第十四・恋四の六九〇・七一〇のどちらともよみ人しらずの歌を「此歌ハ染殿内侍ヲ恋テ景式大君ノ読也」(『弘安十年注』)・「コノ哥ハ染殿内侍力重明親王ニアヒテ朝カヘリケルカ、コヨキイカナル人ニアヒタルソト却テ男ヲ問ケレハ、平定文ネナカラ読ル也」(『毘沙門堂注』)としたりという具合に、歌の成立事情を説明する中に染殿内侍の名を引いている。また、巻第十五・恋五(八〇二)の「寛平御時御屏風に歌かかせ給ひける時、よみてかきける」という詞書の素性法師の歌に関し、「此内侍ハ無双ノ絵力キ也」(『毘沙門堂注』)として、四季の絵を染殿内侍に描かせた時のことだという注をつけたりもしている。その際、『伊勢物語』本文や冷泉家流古注とは関係ない歌や人物に関わる話に彼女の名が使われていることは重要である。彼女は、冷泉家流古注で語られる業平と平定文以外の複数の男たちとも交渉があったという設定なのであり、『古今』注において繰り広げられる説話で活躍する登場人物の一人、と言えるのである。

さらには、「滋春ハ有常ニハ継子也。母ハ染殿ノ内侍也」(『毘沙門堂注』巻第九・羈旅歌・四一二・よみ人しらず)と有常まで巻き込んだり、「此哥ハ良相ノ娘ノ行平ヲ恨ケレハ行平ノ讀ル哥也。良相ノ娘ト云ハ染殿ノ内侍ノイモウト也」(『毘沙門堂注』巻第十一・恋一・五四一・よみ人しらず)と妹を登場させて行平と関係させたりと、業平周辺の人たちとの交渉にまで彼女の行動範囲を拡大させていることが分かる。滋春が『大和物語』や『伊勢物語髓脳』の作者に擬され、『伊勢物語』の補筆者として名前があがるのも、このような現象と無関係ではないであろう。ほかに、「良相ガ娘」としかないので本人か妹か分からない例ではあるが、「此哥ハ、源(ヒトシ)ガ娘ニ通ケル、又能有ガ娘、又、良相ガ娘、此三人ニ通玉ヒケレバ、其ノ事ヲ恨ミテ能有ガ娘ノ読テ昭宣公ニ奉ル也」(『弘安十年注』巻第十五・恋五・七五四・よみ人しらず)と、『大和』第百五十九段で染殿内侍と夫婦関係にあったと語られる源能有その人の娘とともに、基経の恋の相手として登場したりもしている。

ところで、『伊勢物語』の冷泉家流古注を代表する宮内庁書陵部蔵『伊勢物語抄』の染殿内侍に関する記述を検討すると、いくつかの不審な点に気づく。

まず、巻頭で「凡、業平一期会所女、三千七百三十三人也。其中に、此物語には、唯十二人をえらび入たる也。其十二人とは……」として、紀有常の娘・染殿后・小野小町……と十二人の女



の名前をあげる部分である。業平が生彦に契ったという三千七百三十三人という人数といい、女性十二名の選択の顔触れ、そしてあげられる順番といい、この巻頭の記述は明らかに『和歌知類集』からの転載である。『知類集』系統であるなら、女性十二名には染殿内侍の名がないのは当然であるが、『伊勢物語抄』の記述では第一番に登場する紀有常の娘の説明に、「忠仁公姪也。号染殿内侍。母中宮大夫藤原良門娘」と記されているのである。なお、『伊勢物語抄』と近い関係にある広島大学蔵『千金莫伝』（注十六）は「紀有常女」とあるのみで、それ以下の記述は存在しない。

この『伊勢物語抄』の記述では、染殿内侍と紀有常の娘は同一人物ということになってしまう。これを念頭に置きながら他章段の注記を見直してみると、第九段が目に残った。東下りを実際にはなかったものと考える冷泉家流古注では、三河八橋という地名を、それぞれ三人と八人の女性を恋しく思うことだと解している。その『伊勢物語抄』の八橋「三条町・有常娘・伊勢・小町・定文娘（妹）・初草女・当純娘・斎宮」（注十七）の二人目「有常娘」の下には、「染殿内侍」と割注で書かれているのである（『千金莫伝』にはこの割注は存在しない）。これに関しては、異説の引用だと見なして来たわけであるが（注十八）、紀有常の娘の別名が染殿内侍だと記す注だと見ることはできないだろうか。八人のうち、割注が入るのは有常の娘と三条町の二人であり、三条町のそれは「文徳天皇思人／これ高

親王母」という説明であって、異説を載せているのではないのである。

『伊勢物語抄』のこの八橋の注に関しては、以前から何となく奇異な感じが拭い切れなかった。冷泉家流に属する他の古注、たとえば神宮文庫蔵『伊勢物語注本』（注十九）や慶応義塾大学図書館蔵『伊勢物語註』では、八人は「二条后・染殿の后・四条后・伊勢・染殿内侍・小野小町・先斎宮・有常娘」（『注本』）である。私には、こちらの方が余程妥当な選択のように思われる。冷泉家流古注におけるそれぞれの女性の立場を概観したとき、有常の娘が染殿内侍かのどちらか一人を除かねばならないというのには首肯できないのである。正妻格として扱われる有常の娘か、滋春の母である染殿内侍のどちらか一方を省きながら、定文の娘（妹）（第六十一段のみ）と当純の娘（第五十三段の「或本」のみ）（注二十）などという、重要な位置を占めるとは到底思えない二人が入る理由がよく分からない。ただ、『注本』等では三河の三人は八橋の最初の三人と重なっているのに対し、『伊勢物語抄』は、三河の三人「二条后・染殿后・四条后」と八橋の八人を重複しないようにしているということは言える。人数揃えのための苦肉の策だった、ということなのであろう。実際、『伊勢物語奥秘書』は八橋の注に「前の三人に五人をくはへたるの説なり」としていて、三河の三人は『注本』等と同じである。三河と八橋を重ねないようにする説と重ならせる説の二つが存在したことが分かるのである。

『伊勢物語抄』は少なくとも、この第九段の注記と巻頭の『和歌知頭集』からの引用を書いた段階では、染殿内侍と有常の娘は同一人物だと思っていたということになるか。『千金異伝』では、先にも述べた『知頭集』からの引用と八橋の部分だけでなく、巻頭に冷泉家流古注が当てる女たちをあげた部分にも染殿内侍の名が見当たらない。

このような点を考え合わせると、『知頭集』には登場しない存在として『大和物語』から拝借され、さらに冷泉家流古注独自の説話を付与されたのが染殿内侍であり、彼女が冷泉家流古注の説く業平の恋人たちの列に加わったのは、他の人物たちに比べて遅かったように思われるのである。『伊勢物語抄』第十一段には、「有常が娘を阿子とて染殿后御内に行て仕るを」という注記がある。『伊勢物語抄』冒頭と第九段における有常の娘と染殿内侍の混同は、有常の娘の染殿后のもとでの宮仕えが内侍と結び付いてしまった結果であろうか。『伊勢物語抄』は、自らの注釈内での不統一、という不手際を露呈してしまっている格好である。

おわりに

『伊勢物語』冷泉家流古注において、在原業平と関係があった女性の一人に数えられ、しかも滋春の母とされる染殿内侍について、検討を加えてきた。結論としては、實在人物であるか

どうかすら、甚だ疑わしいと言わざるを得ない。というより、實在人物であるかどうかを云々することに意味を見出だす必要もないように思われるのである。

冷泉家流古注が染殿内侍に割り当てた役柄は、「すますなりて」後も男から用事を頼まれるような有能な女性でありながら、「鮑き」を連想させる秋という季節が似つかわしい女性でもある。また、『大和物語』から『伊勢物語』の冷泉家流古注へ、そして『古今和歌集』の中世の注釈書へと広がって行った染殿内侍をめぐる説話世界の存在をたどることができた。さらに、『和歌知頭集』を踏まえて成立した冷泉家流古注が、『知頭集』の方法を踏襲しながらも独自の説を展開して行こうとする中で起こしていた自家撞着を指摘することもできたのである。

#### 【注】

- 一 『尊卑分脈』第四篇（新訂増補国史大系、吉川弘文館、一九五八年）。
- 二 なお、『尊卑分脈』には「怡子」とある。
- 三 その他の章段に染殿内侍を当てる例としては、慶応義塾大学図書館蔵『定家流 伊勢物語註』（慶応義塾大学国文学研究会『平安文学研究と資料』国文学論叢第三輯、至文堂、一九五九年）の第九十五段、鉄心斎文庫蔵『伊勢物語奥秘書』（片桐洋一『鉄心斎文庫伊勢物語古注釈叢刊』第二巻、八木書店、一九八九年）の第一百・百十九段等がある。

四 高橋正治『大和物語』（新編日本古典文学全集、小学館、一九九四年）。

五 『古今和歌集目錄』（『群書類従』第十六輯、卷第二百八十五）。

六 『尊卑分脈脱漏』（『統群書類従』第五輯上、卷第百八）。

七 同書付録の「大和物語人物一覽」では、「藤原因香朝臣の娘など諸説あるが」と「の娘」がついている。明らかに、女性が「朝臣」ではおかしいとの早合点から生じた誤植であろう。

八 以下、歌集は『新編国歌大観』（角川書店）による。

九 片桐洋一現蔵『毘沙門堂本古今集注』（八木書店、一九九八年）。

十 『伊勢物語』本文は、学習院大学蔵『伊勢物語』（鈴木知太郎「天福本伊勢物語」武蔵野書院、一九六三年／小林茂美『伊勢物語』影印校注古典叢書、新典社、一九七五年）により、適宜表記等を改めた。

十一 宮内庁書陵部蔵『和歌知類集』（片桐洋一「伊勢物語の研究（資料篇）」明治書院、一九六九年）。なお、島原文庫本には誰を当てるかの言及がない。

十二 『本朝皇胤紹運録』（『群書類従』第五輯、卷第六十）。

十三 宮内庁書陵部蔵『伊勢物語抄』（『伊勢物語の研究（資料篇）」）。

十四 雨海博洋「梁殿内侍考」（『二松学舎大学東洋学研究所集刊』第八号、一九七八年三月）。

十五 『弘安十年古今集歌注』（片桐洋一「中世古今集注釈書解題（二）」資料篇、赤尾照文堂、一九七三年）。

十六 広島大学蔵『定家流千金莫伝』（『翻刻平安文学資料稿』第三期第一巻、一九九五年七月）。

十七 （「」内に記したのは、『伊勢物語抄』凡例二で「意味の上から、

底本の誤字と推定される場合、右傍の（ ）の中に私解を示した場合も稀にあるが（後略）」とされる傍記である。『伊勢物語抄』第六十一段では定文の妹となっており、他の冷泉家流古注もほとんど妹（鉄心斎文庫蔵『伊勢物語奥秘書』第六十一段のみ定文の娘）なので、それに従って訂正したのである。『千金莫伝』は第九段・第六十一段とも『伊勢物語抄』と同じであって異同はない。

十八 「有常娘の代わりに梁殿内侍を入れるか否かでやはり説々不同であったことを思わせる」（片桐洋一「伊勢物語の研究（研究篇）」五四三頁、明治書院、一九六八年）。

十九 神宮文庫蔵『伊勢物語注本』（廣岡義隆・山口悦子・木戸久二「翻刻『伊勢物語注本』（上）・（中）・（下）」『三重大学日本語文学』第三・四・五号、一九九二・一九九三・一九九四年五月）。

二十 『伊勢物語抄』第五十三段の本文では、二条后を当てながら「或本に云、まさずみの大將のいもうと」とする（第九段では娘とあったが、妹に変わっている）。ここで『伊勢物語抄』の記す「或本」に該当するのは、鉄心斎文庫蔵の「十巻本伊勢物語註」と『増纂伊勢物語抄』（『鉄心斎文庫伊勢物語古注釈叢刊』第一巻、八木書店、一九八八年。どちらも第九段では当純妹だが、『増纂抄』第五十三段では妹ではなく娘）である。ところで、当純が源当純だとすれば、源能有の子ということになるので、当純の妹は『毘沙門堂本古今集注』七五四番に見える能有の娘と同一人物かもしれない。

『きどく』に 東海女子短期大学教員